



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「インド・大菩提寺物語」⑤

クイズ問題2：身体でもっとも汚れる足、足裏が、なぜ仏足石として崇められるのか？

この解答に定説はない。そこで諸説を検討してみよう。

大菩提塔正面（東）から時計回りにまわると、裏側（西）に菩提樹と金剛宝座がある。その横に、右足と両足の二つの仏足石がある。

地元の説明では、両足のものはブッダのもので、片足のものはヴィシュヌ神のものだという。ブッダ・ガヤーの近くに先祖供養の聖地ガヤーがある。そこにヴィシュヌ神の聖足石が祀られている。またお土産物として、銅板に足跡を描いたものも売られている。先祖供養に訪れたヒンドゥー教徒の多くがブッダ・ガヤーに参詣する。ブッダはヴィシュヌ神の九番目の化身だとされているからである。

スリランカの仏教徒は、右足もブッダの聖足石だという。ならば、左足はどこにあるのか。スリランカにブッダが飛来した仏足山頂（スリー・パーダ）に仏足石がある。その聖足石が左足だという。

ブッダの入滅後、ブッダの存在を表現するものとして、仏塔、法輪、菩提樹や仏足石で表現された。仏像をつくって礼拝するようになったのは、2世紀頃だといわれている。ギリシャの影響を受けたガンダーラ説と、インド起源のマトゥラー説がある。

ところで、わが輩が聞いているのは、なぜ足を礼拝するのか、ということである。

「汚れる足裏ではなく、手ではいけなかったのか？」

足に比べたら、手の平・指は万能である。食べることも、物を握ることもできる。足は歩くだけの機能である。

この問題を考えるのに、ヒンドゥー教のパードカー・プージャの儀礼を紹介してみる。パーダは足、プージャは祈りの意味である。入滅したグル（師匠、聖者）の木製スリッパを神聖なものとして崇める儀礼である。履物を聖水やミルクなどで浄め、その全体を花で覆い飾るのである。つまり「故人」ではなく、今ここに存在するグルとして、御足にひれ伏し礼拝するのである。ここで重要なポイントは、イメージネーションである。この履物の上に透明なグル、生存中のグルの姿をイメージすることが不可欠なのである。

龍谷大学のある仏教学者は、仏足石の上に透明なブッダが立っておられる、それ故に仏足石は尊いという説を述べている。従って、仏足石の足指はわが輩の方を向いていなければならない。逆に踵がわが輩の

方に向いているなら、ブッダはわが輩に背を向けていることになる。

このようにみると、聖足については仏教もヒンドゥー教も同じような発想である。“聖手石”では、聖なることば（手話、法印）を表現できても、身体全体をイメージするのに難がある。

近畿大学のある教授は、雨期にブッダが歩いたあとにできる足形が仏足石に発展したという説を述べている。前述したクリシュナ神の足跡の話はこの説を補強するものである。たしかに、ブッダが歩かれた足形の上を弟子や信徒が踏みつけることは畏れ多いことである。

わが恩師（文化人類学者）は、どのように推測しているか。

南インドで、寺院や民家の玄関に米の粉で吉祥の模様を描いている姿を見たことがある。南インドではコーラム、東インドではアルボナという。これは模様を描くことによって幸福の神さまを招き入れることを意味している。この花模様を踏みながら、わが家においでませ、ということである。それが仏足石に発展したのではないか、と関連性を述べている。

ところで、話は全く違うが、ある教授から「なぜ、神は沈黙したもうのか？」という問いを頂いた。遠藤周作の『沈黙』の一場面のことである。深い難問である。

さて、ヒンドゥー教徒たるわが輩は、教授に何と返答したか。

「それぞれの神が、それぞれの言葉を発すると、私には雑音に聞こえてしまいます。それで神は沈黙してしまった、とも思えます。それぞれの信徒がそれぞれの言葉で救いを求めるために神は聞き取れない、のかもしれない」

ミトラ城前の天満宮は入試合格・学業成就で有名だが、神さまが神力で一人の受験生を合格させると、他の学生を落とすことになる。これは理不尽だろう。だから神さまは耳をふさいで沈黙するしかない。どうかボクを不合格にして、他の受験生を合格させて下さい、とはだれも祈願しない。

仏足石の話にもどすと、われらが出来るのは、仏足石に跪いて御足を頂くことだけである。その瞬間だけ、人は謙虚になれるからである。